

伊勢物語初冠段の成立

井川健司

伊勢物語の成立問題に関して、古今業平歌と勢語該当段との比較から、従来より業平歌のみから成るものを原勢語と仮定し、他の章段を副次的成立と見なす考えが広く行なわれるが、現今では行き詰まりの状態に至っており、その打開方法として、逆に副次的成立と目された章段にも光を当て、物語の成立を考える必要があるものと思われる。本稿は、如上の意識のもとに、現存勢語冒頭の初冠段を、成立年代を中心にして考察する。

△△△

昔、男、初冠して、奈良の京春日の里に知る由して、狩にいにけり。その里に、いとなまめいたる女はらから住みけり。この男垣間見てけり。思はず、古里にいとはしたなくてありければ、心地惑ひにけり。男の着たりけるかりぎぬのすそをきりて、歌をかきてやる。その男、しのぶずりのかりぎぬをなむ着たりける。春日野のわか紫のすりころもしのぶの乱れかぎり知られずとなむをいづきて言ひやりける。ついでおもしろき事と思ひけむ。

陸奥のしのぶもぢずり誰ゆゑに乱れそめにしわれならなくに

といふ歌の心ばへなり。昔人は、かくいちはやきみやびをなむしける。(定家本)

源氏物語桐壺巻に於いて光源氏の元服、続く帚木巻の「忍ぶの乱れや」以下は、右初冠段を敷衍して夙に有名であるが、この段の存在は更に遡って、古今和歌六帖や後述する宇津保物語、一条撰政御集等にも窺え、円融朝初期には既に名高い話であったことが知られる。しかし、後撰集をも遡ってその存在を求めるとなると、その姿はなかなか見出せるものではない。それでも、契沖「勢語臆断」や岡一男「古典と作家」には、延喜年間の京極御息所襲子歌合の歌を指摘して、当段の反映を見ており、本稿でもまず此の歌合を取り上げて、その当否を考える必要があろう。問題の歌は(萩谷朴「平安朝歌合大成」)

40 今年より匂ひそむめる春日野のわか紫に手ななふれそも

左

41 紫草むらさきに手もこそふるれ春日野の野守よ人に若菜摘ますな

右

42 千早振る神も知るらむ春日野のわか紫に誰か手ふれむ

である。これらは歌合日記によれば、延喜二十一年三月、宇多法皇の春日詣でに際し、その寵臣大和守藤原忠房が躬恒に依頼した八首と自作十二首、計二十首を法皇に奉り、後日それらを本歌として、河原院にて左右に分かれて返歌する歌合を催した、その時の歌の一部である。

まず40番忠房の本歌だが、これは表裏二つの意味をもつ。ひとつは、「春の春日野にほのかに色づき始めた若い紫草を心なくも手折ってしまうのではないよ、」と草木たる紫草に心を寄せる意、他のひとつは、「新たな春を迎えめつきり大人らしくなってきた春日野の乙女に早々と手出しをするな」、と色好む男を牽制する意である。

次に、41・42番はこの本歌に対する左右の返歌で、41番が本歌の前者の意「紫草」で返したのに対し、42番は本歌合1番の「珍しき今日の春日の八少女を神も恋しとしのばざらめや」とある如く、春日社一八少女のパターンで返したものである。

ところで、ここで注意すべきは、40番の歌が1番の「八少女」という語ではなく、紫草の若草にこと寄せた「わか紫」という語で乙女を表わしている点である。これは、そのことばの意味しているものが、「春日社の八少女」に限定されたものではなく、春日の里のうら若い乙女一般をも表わす比喩表現であるということ、しかもその歌の内容が、乙女に対する懸想を扱っていることから、ここに初冠段との関連を想起させるものがあると言える。さらにまた、「わか紫」ということばに限れば、此の語が乙女を表わす例は、平安時代、延喜年間に至る迄には初冠段（仮定）のほか、上述の歌合歌しか見当たらないものである。当時であつては一般に、

「わか紫」は紫苑・藤、「濃紫」は竜胆・藤、「紫」は後述の古今二首を除いて、紫草・藤・菊・杜若・薄・雲などの形容に、またそのほかには袍や元結の色に使われたにすぎぬ。この点から、「わか紫」乙女」の比喩表現は、まだ新鮮で類型に墮したのではないと知られる。従つて当該両者の、①季節は春、②故里奈良の春日の地にて、③「わか紫」と喩えられる乙女と、④その乙女への恋心、という共通項をくり出せば、その関連性は一層濃厚と見なさなければならぬ。その場合、忠房の本歌二十首は、晴儀の場に奉られたものゆえに、新たな発想、表現より典故引用あるいは伝統的な詠み方が優先した筈で、その点を初冠段先行の理由に挙げて誤りと言えぬであらう。

さて、次に初冠段の内容であるが、作者はなぜ「故里の奈良」に舞台を選び、女を「紫草」にたとえ、しかもそれが「女はらから」でなければならなかったのか……。古今集卷二（春下）には、

90 故里となりし奈良の都にも色はかはらず花は咲きけり
という平城天皇の歌が載るが、業平は同天皇の孫、故里となりし奈良はゆかりの地にあたり、思うに初冠段作者の心底には、上述の歴史上の事実が潜在していたのではないか。

同じく古今集卷十七（雑上）には、

867 紫草のひとつとゆゑに武蔵野の草はみながらあはれとぞ見る
る

めのおとうとをもて侍りける人にうへのきぬをおくるとて
詠みてやりける 業平朝臣

868 紫草の色濃き時はめもはるに野なる草木ぞわかれざりける
の二首がならぶ。867よみ人しらず歌は「本来は草そのものへの愛着

をうたったものであろう」(小沢正夫氏)が、後にこの歌が「愛するひと一人あるゆえ、その関係者すべてに親愛感を抱く」意にも解されることになったのは、868業平の歌に依るところがあったからではないか。というのも、868が867に表現、語句が極めて類似しているに拘らず、集に採られる程の評価を得ているのは、畢竟詞書にあるような詠歌事情によって、同じ「紫草」が「妻(への愛情)」と解される、^{ほん}「新たな意味の付与」がなされ、暗喩の歌に仕立てる手柄を示しているからである。例えば延喜十三年亭子院歌合では、867を本歌として、

29 武蔵野に色やかよへる藤の花わか紫に染めて見ゆらむと詠み、本歌を、草木で愛でると云う本来の意味で受け取っている。ところが一方、兼輔集(歌仙本)には、

故内侍督(藤原満子。延喜八―承平七マデ督。筆者注)の住み給ひし時、藤壺にて菊の賀みかどのせさせ給ひけるに

58 紫のひとつと菊は万代を武蔵野にこそ頼むべらなれとあって、満子との血縁を言って天皇の恩顧を願うという、本歌867を人事詠と見なす歌が見出せるので、恐らく延喜時代には、867に関して一般に両義が認められてきていたらしく(歌意がまだゆれていたらととれる)、その暗喩的解釈を促した要因として、868業平歌の存在を無視するわけにはいくまい。こうして「紫草」に愛人とか愛情とかの比喩的意味を与えたものが、意外にも業平(など)の歌であることを知ったのだが、それが先程の初冠段の「わか紫||乙女」表現誕生に、実はかなり直接に結びついているのではなかったか。何故なら、先程の疑問点、初冠段の乙女はなぜ「女はらから」と設定されたのか、を考えた場合、この「紫草」に比喩的意味を与えた

古今868業平の歌の詞書には「めのおとうと」とあって業平の妻の妹の存在を示し、これは勢語では四十一段(定家本)にあたっていて昔、女はらからふたりありけり。ひとりはいやしき男の貧しき、ひとりはおてなる男持たりけり。いやしき男持たる、師走のつこもりに、うへのきぬを洗ひて、手づから張りけり。ころざしはいたしけれど、さるいやしきわざもならはざりければ、うへのきぬの肩を張り破りてける。せむ方もなくて、ただ泣きに泣きけり。これを、かのあてなる男聞きて、いと心苦しかりければいと清らなる縁衫えんぎんのうへのきぬを、見出でてやるとて、

紫草の色こき時はめもはるに野なる草木ぞわかれざりける武蔵野の心なるべし

となっており、詞書と同様物語にも「女はらから」は登場する。すると初冠段の「女はらから」の設定は、この段から発想された可能性も濃厚といえよう。初冠段と四十一段(あるいは古今868)を比べると、①故里奈良の地(平城帝)は業平に、②「わか紫」の比喩表現は業平歌「紫草」に、③「女はらから」は同じそのものに呼応してくる。此の両者の一種の結びつきは、単に偶然と言うべきか。そうではあるまい。初冠段作者は、「昔、男」に他段にも散見する如く、業平と脱業平の相反する意識を混在させながら、平城帝以来在原氏ゆかりの故里奈良に舞台を設け、四十一段に該当する話も心中に納めながら、実在した業平像を大きく逸脱することなく、しかも岡博士の言われる如く「初段に、奈良の京、春日の里を出したのは、この男は、在原業平ではなく、藤原の若者達で、それが元服して氏神の春日神社に参詣したように見せかけたのである。」(「王朝の文学」との意図をもあるいは重ねもって、当段の想を

構えたのではなかったらうか。

以上、臆測を逞しくしたが、初冠段と忠房歌との共通性・関連性を指摘し、忠房詠進が晴儀の場であったことを考慮し且つ両者の共通点の一部表現が、勢語四十一段説話(あるいは該古今歌)等から得られたのではないかと推定し、初冠段と忠房歌との関係を初冠段→忠房歌と見なそうとするものである。

さて、初冠段の存在を探る資料として、次には新古今和歌集に載る歌、

女に遣はしける

在原業平朝臣

994 春日野のわか紫のすり衣しのぶの乱れかぎりしられず

延喜御歌

995 むらさきの色に心はあらねども深くぞ人を思ひそめつる

をあげよう。この、995の歌は、すぐ前に初冠段の歌が位置するので、あるいは撰者が本歌取りと見なして並べたかと思えるのだが、そうではなく、単なる時代順の配列の結果である。この歌の詠作事情に関しては、詞書の「中将更衣」や歌の「思ひそめつる」等から、後見人(父親)が中将である女が、新たに入内した当日、あるいは翌日、恐らく後朝の歌として延喜帝からつかわれたと推定でき、その歌は「紫(草)の色・深し・染む」という縁語、「そむ(染む・初む)」という掛詞を用いた技巧的なものといえよう。

ところで、この歌の問題点も、なぜ心を(結果として)「紫」に喩えたのか、という事である。心と無関係に「深し」を引き出す為「紫」を用いたと見れば簡単だが、それでは歌が単純で乾いたものになってしまう。それに此の時代にあつては、恋歌には色として通常「紅」が用いられる。古今を例にとると

496 人知れず思へば苦し紅の末摘花の色にいでなむ

661 紅の色にはいでじ隠れ沼の下にかよひて恋は死ぬとも

723 紅の初花染めの色深く思ひし心われ忘れめや

などがあるが、この「紅」を用いずに「紫」を用いたのはなぜだろうか。

「紫」は、先述した如く主に植物の色表現に用いられるが、当該歌はそれではない。そこで、入内という事から、禁色(紫)の可能性は考えられる。衣服令の規定によれば、紫は三位まで、しかし天曆頃までには多少ゆるくなって四位までであるが(後撰112その他の資料による)、それでも「紫」は三・四位までで、「更衣」の身分では無理といえ、位階の点から紫が発想されたとは見られない。結局、考えられる事は、先述の如き恋愛心情の象徴としての「紫」であり、それゆえに「思ひそめつる」と表現して、たとえポーズとしてであっても初恋のニュアンスをもたせたのであろう。そこに、初冠段の影を認めたいのである。なお「そむ」は、掛詞(染む・初む)として使われる例は意外に少なく、延喜の時代頃までの例として、貫之・躬恒、それに融(初冠段・古今)・忠房(先の歌合歌)・右の延喜帝歌など、数例にすぎぬことも考慮すべきである。中将更衣は藤原敏行の息伊衡の女、伊衡の中将は延長二一承平四年延喜帝退位後であるから、中将更衣との呼称は入内当初のものでなくかなり後のものであろう。

次に貫之の歌に移る。(以下、貫之集は西本願寺本)

496 かりごろも心の内に干さなくになど乱れては物思ひをする

陸奥へ下る人を惜しめる

555 狩衣する名におへる信夫山越えん人こそかねて惜しけれ

(歌仙本は「から衣するなにおへるふしの山」) 和歌において単に「衣」を云う場合、通常は歌語の「唐衣」を用いるものだが(貫之も例外ではない)、右例の如く「狩衣」とするのは稀で、貫之の歌の場合、枕詞以外の唐衣十余例に対し狩衣は右二首のみである。496は、「干す・思ひ(火)」の技巧を用いる恋の歌だが、「狩衣―乱れて思ふ」と表現しているところから、語句と歌の内容において、初冠段を髣髴させるものであるが、555になると此の段との関係は一層明らかになる。再び本文の一部を引く。

……男の着たりけるかりぎぬのすそをきりて、歌をかきてやる。
その男、しのぶずりのかりぎぬをなむ着たりける。

春日野のわか紫のすり衣しのぶの乱れかぎり知られず
となむをいづきていひやりける。……

陸奥のしのぶもちずり誰ゆゑに乱れそめにし我ならなくに
といふ歌の心ばへなり。(以下略)

右本文と555を比較してみると、次のことが言える筈である。すなわち、「かりごろもする名におへるしのぶ山」という表現は、融の歌「陸奥の」(古今724)からだけでは引き出せぬもので、必ず初冠段の「しのぶずりのかりぎぬ」という句がなければならぬ。また「かりごろもする名におへるしのぶ山」の「かりごろも」を強調して読めば、この表現は単に融の歌により「しのぶ摺りにちなんで有名な陸奥の信夫山」という意のみならず、同時に、「しのぶ摺りの狩衣の話」も世に聞えているという意にもなっていることで、初冠段の流布が想像されるわけである。

ところで、貫之が歌人として古今の名歌から、その表現語句や内容を撰取して、自家のものとしていたことはよく知られるが、殊に

業平に対しては土佐日記を例にとっても、敬慕の念と影響が随所に窺える。また歌においても、

寝ぬる夜の夢を夢みまどろめばいや夢にもなりまさるかな
(古今業平・勢語百三段)

いとどしく過ぎゆく方の恋しきにうらやましくも帰る波かな

(後撰業平・勢語七段)

などを利用して、

463寝ぬる夜の夢は波にもあらなくに立返りても人を見るかな

別れつる程は経なくに白波の立返りても見まくほしきか

(前者は貫之集・後者は古今六帖五)

と詠んでおり、その他、勢語との関係を調べても、今は若干の指摘にとどめるが、例えば八十七段の一部(ぬき乱る―古今業平)、
わが世をばけふかあすかと待つかひの涙の滝と孰れたかけむ
あるじ、次によむ

ぬき乱る人こそあるらし白玉の間なくも散るか袖の狭きに

を取ったのではないかと疑わせる歌

49ぬき乱る涙も暫しとまるやと玉の緒ばかりあひ見てしがな
が貫之集にあり、また同じく勢語六十五段、

……わががくる心やめ給へと、仏・神にも申しけれど、いやまさりにのみおぼえつゝなをわりなく恋しうのみおぼえければ、陰陽師・かむなぎ呼びて、恋せじといふ祓の具してなむ行きける。祓えけるまゝに、いと悲しき事かずまさりて、ありしよりけに恋しくのみおぼえければ、

恋せじとみたらし川にせし禊神はうけずもなりにけるかな
を下敷に詠作したかと思われる歌

236 つらき人忘れなむとて破ふれば狭くかひなく恋ぞまされる

などが貫之集にあって、貫之在世中での勢語の存在、及びそれと貫之との親近した関係を想定したくなる程であり、貫之作者説(山田清市「伊勢物語の成立と伝本の研究」)が出るのももっともと言えよう。このように、勢語・業平と貫之との密接した関係を指摘できる事を考慮すれば、さきの貫之の歌が初冠段を受けて詠まれていたとしても、それは当然すぎると言わねばならない。

以上、京極御息所歌合・新古今収載延喜御製そして貫之の歌を資料として、後撰以前における初冠段の存在を把えようと試みたが、その結果成立の下限は、早ければ延喜年間、遅くも貫之の死以前には既に成立していたと思われる。

最後に、初冠段の成立年代にも関連して、初冠本の成立流布に言及しておく。これは、現存勢語諸本に章段の出入があり、また嘗て狩使段を冒頭に置く狩使本が存在したと伝えられるところから、原勢語は雑纂形態であるとか、伊勢物語と云う題名に結びつけて、狩使本が初冠本に先行するとかの仮説が行なわれる、それにかかわる話であるが、今は仮定や臆測をできるだけ排し、勢語以外の資料に基づいて初冠本の早期成立を確証したい。

まず宇津保物語である。この「春日詣」の巻には、左大将正頼一行が春日に神楽を奉った折、一行がこぞって題詠した記事があつてその中に、

左衛門佐あきずみ、「雪をうつす山」、

富士の嶺は春日の春をよそに見て鹿の子の雪も今や消ゆらむ
という歌が見えるが、この「富士の嶺—鹿の子の雪」は勢語九段(東下り)の歌「時知らぬ山は富士の嶺いつとてか鹿の子まだらに雪

の降るらむ」を念頭に置いて詠まれたものであり、且つ「春日」から「富士の嶺、鹿の子の雪」への連想は、初冠段「春日の里」から始まって「東下り」に展開する伊勢物語(初冠本)に依って行なわれた、と言える。

次に一条撰政御集「豊蔭」冒頭

大蔵の史生倉橋の豊蔭、口惜しきげすなれど、若かりける時女のもとに言ひやりける事どもを書き集めたるなり。……をかしと思ひける事どもありけれど、忘れなどして後に見れば殊にもあらずぞありける。……年月を経て、かへり事をせざりければ、負けじと思ひて言ひける。

あはれとも言ふべき人は思はえて身の徒らになりぬべきかな
女からうじてこたみぞ

なにごとも思ひ知らずはあるべきをまたはあはれと誰か言ふべき

はやうの人はかうやうにぞあるべき。いまやうの若い人は、さしもあらで上ずめきてやみなんかし。

であるが、文中の「口惜しきげす」「殊にもあらずぞありける」等は、勢語の随所に指摘される自記性の強いとされる「謙退卑下」の言辞であり、この「豊蔭」が勢語の影響下に成り、しかも「若かりける時」で始まり「はやうの人は……いまやうの若い人」で結ぶのは、勢語初冠段「初冠して……昔人はかくいちはやきみやびをなむしける」と同発想・類似表現で、それが集の冒頭に来る事から、藤原伊尹(924—972)の時代には既に勢語が存在し、然もそれは初冠段を冒頭に据えた形態であったことが知られるのである。つまり、後撰集の頃には伊勢物語が成立しており、初冠本が流布していたと推定される。